

矢作川研究No.13の発刊にあたって

豊田市矢作川研究所

所長 水谷 清

市民をはじめ関係者の皆様方には、豊田市矢作川研究所の運営に日々多大なご支援、指導、協力をいただき心よりお礼を申し上げます。

このたび、先に発行しました矢作川研究No.12の特集「豊田市矢作川研究所 12年の歩み」の中で紹介しました「古巖プロジェクト」に関する一連の事業が、2007 土木学会デザイン賞優秀賞に輝きました。対象は「矢作川古巖水辺公園／お釣土場」です。

近年、矢作川は本来川が持つ自然と川のダイナミズムが失われ、川の様相が変りつつあると心配されています。このプロジェクトは川本来の多様な流れと空間の復元をめざし、昔からの自然工法を見直し、川の中の自然石の水制工を主とし玉石護岸や植生護岸を施し直線のない川らしい水辺の創出を追求したものです。これは公園整備ではなく、あくまで矢作川の本風景へのこだわりであり、川と河畔を含む自然生態系の回復を試みたものです。矢作川には7つのダムがあり、流量の安定化による流路や河床の固化や川の濁りにより生息環境は大きく変化し、アユをはじめとする魚類が棲家を奪われ、カワシオグサのような特定生物の異常発生や外来生物の侵入等により生態系のバランスが崩れかけてきました。古巖プロジェクトを立ち上げ調査をすすめるなかで、川の「ながれ」と「河畔の自然生態系」の回復に注視したのです。そのために、生物・生態学をはじめ河川工学、社会学の異なった分野の研究者が参加し調査研究に携わり、地元の皆さんや矢作川研究所をはじめとする研究グループと事業者である行政との共働きの精神が形として働き、今回の結果につながってきたと思っています。

調査で明らかになったことは、竹林が放置され密生し光が遮られ暗く、林床の植物は貧相で昆虫の種類も少なく、鳥の利用はごく限られています。逆に、広葉樹林では草本植物も多様で、昆虫類も豊かで鳥の餌場として最適です。また、中州は外部と隔離され幼鳥にとって安全であり、繁殖に適した環境のようです。生態系にとっては河川敷・河畔林の広葉樹林化が望ましいが、一方、密生化している竹林にたいし健全な植生維持のための適正な密度管理を図る、といった竹林の管理手法についての提言と同時に竹林整備が実施されたのです。また、整備された河畔林を守るため地元の皆さんによる河川愛護会が地域ごとに誕生したことも喜ばしい成果といえます。

矢作川の生態系に及んでいる危機はただ単に古巖・お釣土場だけの問題ではなく、全体的に矢作川の川辺は竹林で覆われ広葉樹林が縮小し健全とは言いがたく、生態系への影響は大きいと言えます。今、豊田市河川課と矢作川研究所では矢作川上・中流域の河畔林の調査・整備に取り組んでおります。研究所では河畔林整備基礎調査を平成18～19年度で実施し今年度まとめに入っています。と同時に平成19年度には地元の人々による「矢作川河畔林づくり」のワークショップを開催しました。

矢作川にはたくさんの生き物の営みがあり、生命の宝庫といわれています。しかし、人間の都合と身勝手により川をはじめ自然の恵みを利用するばかりで、川などの自然を乱暴に扱ってきたため多くの生き物が棲家を奪われ存命の危機に陥っています。餌場の喪失とか新たな外的である外来種の出現により在来種が脅かされつづけ、中には絶滅のおそれが危惧されている種もでてくる有様です。生態系が乱れ単調化、単調性により不健全化を招いてきています。生き物は独りでは生きられず、一旦絶滅すると復活は至難の技といわれています。殊に、多様な食べ物を必要とする人間にとっては脅威であり、種の保全を図り生物の多様性を維持することは、自然を取り戻すと共に私たち人間の生活を守ることに他ならないと、多くの研究者が警鐘を鳴らしています。

矢作川研究所は、アユをはじめたくさんの生き物の生態の調査・研究を続けてまいりました。矢作川の生態について、科学的に問題を探求し、実情を明らかにするとともに、乱れかけている生態系のバランスを保ち、保全に努めてまいりたいと考えています。川は水の流れと水辺の河畔林が織り成す自然域であり、水の中の生き物と陸上の生き物が共生する生態系の一体的空間と捉えることができます。それに、人間の生活も深く関っており、これからの自然と人間の関り方についても探っていかなければなりません。そうした観点から、今後も矢作川の豊かな自然と水の回復をめざし、より研究に精進するとともに市民をはじめ関係者の皆様とのパートナーシップを深めてまいりたいと考えています。

皆様には今にもましてのご支援とお力添えをお願いいたします。